20230402　朝礼拝　マタイによる福音書 27 章 32～56 節

「人の死ぬ瞬間」

昔、主の御受難の説教と、ご葬儀の説教は、通じる部分があるのか、どうか、友人たちと議論したことがあります。主の御受難の説教とは、つまり、今日の説教のことですが、今日の説教のテーマは、「イエス様の死」ということです。「ある特定の人物の死」をテーマとする説教は、それは、ご葬儀における説教と一緒です。しかし、結論としては、もちろん多くの面で違うところがあります。

ご葬儀の説教の場合、亡くなった方の生い立ちや、お人柄に想いを馳せて、その方から頂いた沢山の学びや愛情に感謝しつつ、その方の行く先の平安を祈り求める、ということをしていきます。その方が亡くなった意味や目的などは、考えたところで分かるはずもないので、神様に委ねる他ありません。一方で、主の御受難の説教は、亡くなったイエス様の、その亡くなった意味と目的について積極的に解き明かします。「救いの為」「贖いの為」という風に。逆に、イエス様の生い立ちやお人柄には踏み込みはしません。まして、私たちが生きる現在から、2000 年も前に死んだイエス様に頂いた「学びや愛情」への感謝ということには、なかなか思い至りません。感謝するとしても、それはイエス様の死によって、その先に予定されている救いと贖いに対してです。つまり、イエス様の死に際して、私たちはイエス様の人生にはあまり興味を持たないのです。「ある特定の人物の死」をテーマとする説教、という点は共通ですが、私たちは、受難節や受難週において、イエス様のことを考えているようで、あまり考えていません。イエス様という尊く掛け替えのない人格的存在よりも、十字架という素晴らしくも無機質な神学的理論の方にばかり目を向けがちです

なので、どうでしょう。今日は、ご一緒にイエス様の「お葬式」をしませんか？ 「世界を救済す

る全き犠牲」とか「その死をもって贖罪を実現された」とか、そういう大袈裟でイマイチ実感の伴わない神学用語は忘れて、ただ、私という存在を愛してくれて、しかし、人生の半ばで苦難を背負い、この世に思い残すことがありながら、この世から旅立って行かれた、そんな私たちの大切な人が死んだという、その事実を見ていくというのは、どうでしょうか。来る次の金曜日に亡くなったのは、「私を愛してくれた大切な人」だとすれば、それは私たちが哀悼を持ち寄り、慰めを求めてご葬儀を執り行うべき存在だと言えないでしょうか。私たちがご葬儀に参列する際に、その亡くなった方の「死」によって得られるものよりも、その亡くなった方の「死」によって失われたものを名残惜しんで涙を流すように。「死」ということを理屈で考えて、「この方の死には、こんな意味があるのです」と納得した顔で語るなど決してできないように。私たちも、大好きなイエス様が死んだこの出来事を・・・、いや、現実はもっと残酷であって、大好きイエス様が大群衆に馬鹿にされつつ殺された、この出来事を、利口な神学理論や聖書学的知識に基づいてでなく、哀悼の想いを持って捉えてみることは、きっと間違いではありません。イエス様の死とは、全世界の救済という天命を帯びた神の子の死である一方で、間違いなく、一人の人の死でありました。私たちの大好きな人の死でありました。そこに純粋な死別の悲しみを憶えてはいけない理由はありません。もっとも、後に復活することを知っている私たちは、もうすでに「純粋な死別の悲しみ」を持つことは、そもそも、できないのかも知れませんが、ただ、今日は、高尚な十字架の意味よりも、隣にいる大切な人を喪ってしまった悲しみに焦点を当てて参りたいと思うのです。という事で、少々違和感があるかも知れませんが、これから私は、故イエス・キリストの葬儀説教を行います。本当にします。ちょっと創作物語のようになりますが、どうかお付き合い頂けますと幸いです。

私たちの敬愛するイエス様は、寒さ厳しい 12 月のベツレヘムにお生まれになりました。ちょうど、その時は、行政機関からの要請で本籍地のある自治体で人口調査の為の届出をすることが求め

られていました。言い換えるなら、非常にアナログな国勢調査といったところでしょうか。郵送とかオンラインとか、そういう便利な仕組みがなったわけですから、イエス様の御両親も、大変な想いで、本籍地ベツレヘムまで向かわれたのです。しかし、中国における春節の国民大旅行のように、国勢調査中のイスラエルは、どこも旅人で溢れていたと言います。イエス様の御両親も、今のように宿泊予約などできるはずもなく、何件も宿を断られたんだそうです。そもそもですが、皆さんもよくご存じのように出産予定日を迎えたお母様のマリアさんを連れた長旅は、無茶なことでありました。宿屋を探すお父様のヨセフさんの焦り具合も十分に想像ができます。結局、とても信じられないことですが、イエス様の御両親は、とある宿屋の馬小屋を借りて宿泊されたんだそうです。そして、その夜に、イエス様はお生まれになりました。なんとも、すごいお話だなぁと思いながら、私はイエス様のお生まれになったお話を聞きました。しかし、イエス様のその後の賢く、逞しく、しかし、優しさを忘れないご生涯を思い起こせば、馬小屋でお生まれになったという経験も、きっと神様の御計画だったのだろうと思います。イエス様は、きっと、どんな貧しさや不自由さにも共感できるようにと、馬小屋でお生まれになったのです。ただ、イエス様がお生まれになった時、一番大変だったのは、マリアさんだったでしょう。ヨセフさんもきっと身の回りのお世話で大変だったと思います。馬小屋での初産、みならず、その後にあったという羊飼いや星占い師たちへの来客対応も含め、お話を聞くだけでも、その時のドタバタ具合が思い浮かびます。そんな大変さの最中、でも、お二人の間には、可愛いイエス様がいたのです。大変だったけど、今では良い想い出なんだと教えて頂きました。しかし、そんな得難い良い想い出を分かち合う、お母様のマリアさん、お父様のヨセフさんにとって、このようなイエス様の最後と言うのは、本当に言葉にならないことだと思います。私も人の親ですから、それが、どれほどの悲しみなのか・・・、いや、むしろ、私も人の親だからこそ、想像もできないくらいに大きな悲しみに違いないと言うことしかできません。本

当に、子どもを見送るお母様、お父様の苦しさは、安易に同情することなどできないでしょう。私は牧師として、本来であれば、お母様とお父様に、聖書に基づく慰めの言葉を掛けるべきなのかも知れません。しかし、私にできるのは共に悲しみ、神様の慰めが豊かに注がれるよう祈ることだけです。

イエス様は、神様の御心のままに、この世から旅立って行かれました。十字架に磔にされて死ぬなんて、ここにいる私たちの誰が想像したでしょうか。あんなにも聡明で、優しく、誰にでも声を掛け、気遣いを忘れなかったイエス様が、あんなにも悪意に満ちた言葉に背中を押されながら、死ぬなんて、誰が想像したでしょうか。神様の御心は不思議でしかありません。なぜ神様は・・・、なぜ神様は、私たちの大切なイエス様をお見捨てになったのか。その疑問は、きっと、これからも消えることはないでしょう。

しかし、同時に私たちの心から消えて無くならないのは、イエス様がしてくださった多くの奇跡と、語ってくださった多くの言葉であります。イエス様の死の悲しみは消えません。その死に対する疑問も消えません。しかし、私たちは知っています。イエス様が、どんなに貶められて十字架で処刑されたのだとしても、イエス様の生き様と偉業は、本当に素晴らしかった、ということを私たちは知っています。ここにお集りの方々の中にも、イエス様の不思議な奇跡によって助けられ、励まされた方もいらっしゃるかと思います。ケガを治して頂いた方、病を癒して頂いた方、心や体の重荷を取り除いて頂いた方もいるでしょう。私たちは、何故、イエス様がそんな不思議な奇跡を起こせたのか、詳しいことは知りません。けれど、何よりも嬉しかったのは、イエス様が私たちのつらさや悲しさや苦しさに寄り添ってくれて、「何とかしてあげよう」と思ってくださったことです。イエス様にとって、私たちは大切な存在だったのです。イエス様は、私たちを愛してくださっていたのです。もちろん、最初その時はケガが治り、病が癒されたことが一番嬉しかったと思います。

でも、そこにイエス様の愛が確かにあったということが、今、イエス様を偲び、思い巡らす中で、最も嬉しいのだと私は思います。

イエス様は、本当に愛の人でした。私たちが近づくことを躊躇うような人たちにも、積極的に関わり、ご飯を一緒に食べて、一緒に語り合っていました。明らかにイエス様のことを嫌い敵対する人にもイエス様はちゃんと向き合われました。私たちは、最初、そんなイエス様の非常識なお姿に驚き、戸惑ったこともあったかも知れません。少なくとも、私はそうだったことを正直に告白します。私には決してできない、時に深く寛容であり、また時に鋭く毅然とした態度を、イエス様は、いとも簡単に示されました。その確信に満ちたイエス様のお姿には、きっと神様への信頼があったのでしょう。神様の愛を、ちゃんと実現したいという願いがあったのでしょう。

ただ、その信頼や願いに裏打ちされた確信ある言葉や行動というものは、イスラエルの上層部にとって、疎ましく見えたことは事実かも知れません。自分のことを「神の子」と言うほどに、神様のことを愛し、そして、愛されている確信を持っていたイエス様には、確かに多くの反感と敵意が向けれたでしょう。弱い私たちは、「そんな意地を張って、敵を作らなくてもよかったのに」と思うかも知れません。以前、イエス様の良き理解者だったペトロさんも、イエス様に「そんなことを言わない方がいいですよ」と注意したことがあるんだそうです。でも、その時、イエス様はとても怒ったんだそうです。「神様のことを思わず、人のことを思っている」と言って、ペトロさんを逆に注意したんだと言います。

しかし、この時、イエス様がペトロさんの注意を聞き入れて言葉と行いを改めていたなら、もしかしたら、私たちは、大好きなイエス様を喪わずに済んだのかも知れません。ある意味で、イエス様は自分の意思で、死に向かって歩んでゆかれたと言えます。イエス様のことを愛する私たち、とくにご両親やご遺族の方々にとっては、そんなイエス様の自死行為のような振る舞いは受け入れ難

いことだと思います。しかし、私たちがここの為すべきは、イエス様の選ばれた道を否定することではなく、そうまでしてイエス様が貫こうとされた想いに耳を傾けることです。私たちはイエス様のことを大切に思うが故に、彼の遺志を受け止めるべきであると私は思います。

思い出したくもないことですが、イエス様が私たちの目の前で刺し貫かれ、死んだ十字架の時のことを思い出してみますと、その時に沢山の不思議なことが起こりました。いや、正確には、起きたように感じられただけかも知れません。岩が裂けたり、地震が起こったり、死者が蘇ったり、と今思い出しても、本当にそんなことがあったのかと自分でも不思議に思いますが、ここにお集りの皆さまも、同じような光景が目に見えたのではないでしょうか。私は、中でも神殿の垂れ幕が音もなく二つに裂けたことが忘れられません。私たちの大切なイエス様が亡くなる瞬間に、私たちの大切な神殿の垂れ幕が裂けるなど、偶然ではないでしょう。これは、私の勝手な考えですが・・・、私たちはつらいとき、悲しいとき、衣を裂くようにと聖書によって教えられています。本当に着ている衣服を裂く人はあまりいないかも知れませんが、代わりに、私たちは本当に悲しいときには、胸と心を裂くような苦しみを憶えます。裂くものは違えど、本当につらい時、私たちも何かを裂かずにはいられないのです。そして、神様も、神様のために尽くし、人に寄り添い、人を愛し、その確信が揺らぐことなく走り抜けていったイエス様の死に際して、何かを裂かずにはいられなかったのだと思います。私は、あの時、神殿の垂れ幕が裂けたのは、神様なりの哀悼の表現だったのかも知れないと思えてならないのです。今、私たちが悲しみを持ち寄り、こうしてイエス様の死を悼んでいるように、神様も天の上で、イエス様の死を悲しんでおられるのだと思います。

そして、2 つ目に忘れられないことは、私たちの生活を縛り、私たちの自由を奪う、ローマ軍の百人隊長が、茫然とした表情で、こう言ったんです。「本当に、この人は神の子だった」と。私は耳を疑いました。でも、確かにそう言ったんです。御両親からすれば、「いや、イエス様は私の子

どもだ」と言いたいかも知れません。そのお気持ちもよく分かります。しかし、私は、百人隊長の言葉を聞いて、最初は意味が分かりませんでしたが、今、ようやく分かるようになりました。私たちにとって非常識で、とても危なっかしくて、敵を作ることが多くて、そして本当に命を落としてしまったイエス様の生き様は、でも、私たちの敵にも届いたんだな、と。私たちが敵だと思い、嫌い、軽蔑し、相容れないと思っている、そんな人たちの心にも、イエス様は入ってゆかれるんだな、と。本当に、凄い人だな、と私は思いました。私たちは敵を嫌い、憎み、批判することをしがちです。しかし、イエス様は愛して、寄り添って、本当に誰とも隣人なれるのだと思いました。

もし、願いが叶うなら、もう一度、イエス様と共に、敵と分かり合い、敵と和解することを実現して参りたいと思います。もし、願いが叶うなら、もう一度、弱い私たちの心をイエス様に支えてもらいたいと思います。でも、イエス様は、もう私たちのところから旅立って行かれました。だから、今は、イエス様の魂の平安と神様の御許での永久の平和を祈り求めて参りたいと思います。そして、イエス様が示してくださった数々の奇跡や言葉や、その尊い後姿に感謝しつつ、教えられた大切なこと一つ一つを言葉と行いで示して参りたいと思います。先ほど、私は「イエス様のことを大切に思うが故に、彼の遺志を受け止めるべきである」と言いましたが、その通り、イエス様が教えてくださった隣人愛を、私たちも、イエス様が愛された、この世界の為に、しっかりと示して参りたいと思います。それがきっと、先に旅立って行かれたイエス様の願いを満たすのだと私は信じています。

最後にお祈りをします。

神様。今日、私たちは、敬愛してやまないイエス様の、その死を悼むために、ここに集いました。あんなにも賢く、愛に満ち、優しさに溢れていたイエス様を、私たちのところから奪って行かれたあなたの御心は、本当に不可思議としか言えません。しかし、あなたは、いついかなる時も、どん

な人に対しても、御心のままに振舞われます。未だに地上を生きる私たちは、あなたが示された「イエス様の十字架」という出来事を、ただ受け入れる他ありません。しかし、あなたは愛と慈しみの神様です。どうか、先に旅立って行かれたイエス様の全身全霊をあなたが守り、一つも損なうことがないようにしてください。イエス様の、あなたに対する愛と信頼に相応しいだけの平安と恵みを注いでください。そして、未だ地上を生きる私たち一人ひとりのこと顧みて、イエス様を喪った悲しみを癒してください。いつか必ず、イエス様と再び相見えるという希望を持ちつつ、私たちがそれぞれの日々を歩むことができますように。どうか力強い導きとお支えをお願い致します。天の上には永久の安らぎがありますように。地の上には、豊かな慰めと尽きない希望がありますように。

このお祈りを、主の御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。

4 月誕生者の祝福祈祷

聖書：イザヤ書 46 章 3〜4 節

あなたたちは生まれた時から負われ／胎を出た時から担われてきた。同じように、わたしはあなたたちの老いる日まで／白髪になるまで、背負って行こう。わたしはあなたたちを造った。わたしが担い、背負い、救い出す。

神様。

暖かい風を感じ、花々の美しさを感じるこの春のひと時、私たちは４月にお生まれになった方々を憶えて祈りを合わせています。あなたは、私たちが生まれる前から、私たちの名を呼び、その人生のいかなる時も、共に歩み、必要な癒しと慰めをいつもお与えくださいました。そして、これから始まる新しい日々においても、あなたのお守りの内に歩んで行ける幸いを感謝致します。４月に生まれた尊い信仰の友人たちの上に、どうかあなたからの豊かな恵みと祝福をお与えください。また、人は独りで生きるのではなく、多くの人たちに支えられ、助けられる中で、その人生を全うしてゆきます。どうか、４月の生まれの方々の周りにいらっしゃるご家族、ご友人をも、あなたが守り導いていてください。あなたの大いなる愛が、すべての人を包み、全き平安で満たされることができますように。

この祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。